大阪市立美術館の設計思想

児島大輔

はじめに

このたび当館は生きた建築ミュージアム フェスティバル大阪のアフターイベントとして館内ツアーを催し、建物の魅力に親しんでいただく機会を提供した。その際、当館の設計思想について雑駁ながらも調べのついたことを報告した。本稿はそれをもとに、当館建物の歴史をその設計に焦点を絞って記すものである。

1. 美術館設計前史

まず、美術館建物の概略について記しておきたい。以下は阪井卓氏による『大阪市立美術館五十年史』（以下『五十年史』と略す）をはじめとする先行研究や諸先輩方より聞き及んだことのあらましである。[註1]

大正九年（一九二〇）、美術館の設計図案を懸賞公募によることとし、十月三十一日付各紙上に発表した。しかし、この募集要項はかなり杜撰なものだったようだ。建築学会は『建築雑誌』にこの募集規程を掲載した際に「懸賞募集規程として不備なる点少なからず、就中敷地の不確なると審査員氏名の不明なるとは最も遺憾と思惟する所なり」と公然と批判を加え、これらの不明点を建築学会として大阪市長に照会中である旨を付記している。[註2]

実はこの時、まだ天守閣の復興されていなかった大阪城内に美術館を建設しようとしたものの当然のことながら当時管理していた陸軍より許可が下りず、美術館建設予定地は宙に浮いた状態だったのだ。[註3] ところが、先の募集規程では高燥の地に西向きに建てることを条件としており、植松清志氏はこの時すでに現位置に建造する計画があったものと推定している。[註4]

大正十年一月末日に締め切られたこのコンペは、大阪美術館設立調査委員会の武田五一、片岡安、澤村専太郎らの選考によって、応募総数一三七通の中から一等賞に前田健二郎案を選出した。前田は当館の設計コンペを皮切りに、神戸市公会堂、早稲田大学大隈記念講堂、京都市美術館など錚々たるコンペで入選を重ね、「コンペのマエケンさん」の異名を取るほど公募荒らしをしていたことで著名だったらしい。[註5] しかし、この前田案は実施設計でほとんど活用されることはなかった。杜撰な公募、選出すれども採用せず、という一連の流れはいかにも大阪市らしい所業である。実際に採用しなかったことについて片岡委員は「全体を通じて美術館の内容を知らず設計したものが多かった」と審査所感を語っている。[註6]

懸案の敷地問題は住友男爵家の「美挙」によって解決された。コンペを実施した大正十年末、住友吉左衛門家が本邸敷地の寄付を申し出たのである。当館の敷地一体は東側の慶沢園、北側の茶臼山を

含んで旧住友家本邸の跡地である。内国勧業博覧会開催以降、いわゆる新世界をはじめ周辺地域の猥雑なることを忌んだ住友男は転居、のちに「人生の唯一の失敗は茶臼山に屋敷を建てたことだ」と子息に語ることになる、いわくつきの土地である。[註7]

2. 実施設計とその設計思想

敷地問題の解決からやや遅れて大正十二年（一九二三）頃から大阪美術館設立調査委員会が実行委員会的組織に改められ、その指導のもとで大阪市建築部営繕課が実施設計に着手した。同委員会の建築担当委員は京都帝大教授の武田五一と片岡設計事務所長の片岡安であった。いずれも関西近代建築界の大立者である。武田には腹案があり、これによると慶澤園を大きく削る必要があったようだ。

この時、営繕課は課長・波江悌夫、主任技師・伊藤正文、技手・渡邊久雄という布陣で臨み、のち転出した波江の後任として富士岡重一が課長に就任している。波江は大阪城天守閣の設計者として著名で、当館の設計当時を回想して将来館長として嘱託された澤村専太郎調査委員と相談のうえで次のような事項を協議したと言う。[註8]

（イ）建物は三階建、延三五〇〇坪前後、一階は半地下。
（ロ）大小講堂、研究室、休憩室を設ける。
（ハ）事務関係諸室は一階、食堂・喫茶室を設ける。
（ニ）倉庫保管庫を完備し委託管理に便する。
（ホ）陳列室採光については、特別の研究をすること。
（ヘ）彫刻室はホール・大室を利用し採光に注意すること。
（ト）電気暖房衛生昇降機などの近代設備の利用。

さらに、先に触れた武田案に対して建物を西寄りに建てることで慶澤園を保存し、明治末年の名園を後世に残すことを基本方針としたという。澤村と波江の卓見である。

こうした委員や議会との折衝は波江課長の仕事だったようだが、その意を受けて実際に手を動かしたのが伊藤・渡邉両氏だったようだ。波江は回想の中で「立体図案は伊藤正文氏の作である」と明言しており、[註9]当館の実施設計者を一人挙げるとすれば、それは伊藤正文ということになろうが、公式には「大阪市建築部営繕課」というクレジットがつく。

その伊藤は、昨今再評価の進む日本インターナショナル建築会の中心人物のひとりで、同会のスポークスマンとしての役割を担っていたことが近年明らかにされている。[註10]同会は昭和二年（一九二七）に結成されたいわゆるモダン建築を標榜する建築家集団であり、ブルーノ・タウトを初めて日本に招待したことでも知られ、同氏のほかインターナショナル・スタイルの提唱者でもあるヴァルター・グロピウスはじめとする海外会員を含め最盛期には二〇〇人の会員を誇った。同会の基本となる理論は建築における「インターナショナル」と「ローカリティ」の問題を技術的に突き詰めることで解決するということであった。のちにこのインターナショナルが共産主義と混同、誤解されて昭和八年（一九三三）には解散状態となった。[註11]

伊藤は同会に結成当時からかかわり、同会誌『インターナショナル建築』の表紙デザインを担当したほか、同誌上に「意匠の研究」を連載するなど同会の理論的支柱として活躍していた。[註12]伊藤が当館の実施設計に尽力していた時期は、まさに同会での精力的に活動していた時期に一致している。

では、その成果である美術館建物を見てみよう（**図1**）。

美術館は鉄骨鉄筋コンクリート造。近代日本式の三階建。ファサードは切妻造土蔵風の中央部から両翼部が伸び、全体が土蔵をイメージした造りとなっている。屋根には瓦をスパニッシュ風に傾斜をつけて葺くが、丸瓦と平瓦を併用するれっきとした本瓦葺であり、この大ぶりの瓦は泉州産である。軒下の蛇腹は全体の雰囲気から古代ギリシャ神殿の軒蛇腹（コーニス）を思わせるが、浅い軒の出とともに土蔵をイメージしたものと見るべきだろう。中之島から移設された近世後期の遺構、黒田門と通称される旧黒田家福岡藩蔵屋敷長屋門[註13]、および美術館の傍らに立つ旧住友家土蔵（**図2**）と比較すれば、その類似性はおのずと明らかであろう。では、なぜ土蔵を意識したデザインが採られたのであろうか。

（図１）大阪市立美術館（西面）

（図２）天王寺公園内に残る土蔵

先述した澤村・波江の協議（二）に明らかなように、基本的な設計コンセプトの根幹に収蔵庫を備えるということがあった。現在からすれば当然のことのように思えるが、美術館の建設例が少なかった当時にあっては、こうしたことですら協議する必要があったのである。すなわち、当館は単なる展示施設ではなく収蔵庫機能を備えていることを象徴的に表現した結果が土蔵風デザインということになるのであろう。澤村・波江協議で建設されることとなったこの収蔵庫は、「戦時中大阪府市や裁判所ならびに軍部の重要書類の保管金庫として安全に保管された」らしい[註14]。

ところで、伊藤らが深くかかわった日本インターナショナル建築会は、当時流行した国粋主義的な日本・東洋趣味に対して強い嫌悪感を抱いていた。その最たる例が東京帝室博物館の設計コンペに際して次のような声明を出して参加を断固拒否したことだろう[註15]。

「声明　一九三一年一月一五日

我々は現に公募されつつある東京帝室博物館の懸賞設計に対し応

募しないことを声明する。
理由
（1）偏狭なる個人的趣味を意匠の規準とし之によって一律の審査を為さんとする写査方針及び募集規定の一部に反対である。
（2）最近数回の建築懸賞設計の経過より観て技術的立場から該協議の審査員会に信任を置くことが出来ぬ。」

帝室博物館の募集規定で「日本趣味を基調とする東洋趣味」という、いわゆる帝冠様式のような建築意匠を求められたことに対して彼らは拒絶したのだった。この声明文を冒頭に掲出した『インターナショナル建築』誌上で、伊藤自身は「伝統とは伝統的形式ではない。趣味とは主観的産物であった、社会に押売すべき性質のものではない」と宣言している。(註16)

では、当館の土蔵風デザインをどのように考えるべきであろうか。設計にかかわった渡邊久雄の記述は「外観は、美術を陳列し、保管すると云ふ上から、日本の御庫風の形式が採用された」と実にあっさりしたものである。(註17)

そこに伊藤らの思想は意匠として表現されていないのであろうか。伊藤の解釈によれば建築における「インターナショナル」とは科学的観察に基づく合理的な現実であり、そこからは観念的な思考方法が排撃されていなければならなかった。(註18)土蔵風のデザインを「ローカリティ」に見立て、洋風の窓枠装飾やスパニッシュ風の瓦葺、あるいはイスラム風のアーチ装飾に「インターナショナル」を見出すこともできるかもしれない。とすれば、当館のデザインは見事に「インターナショナル」と「ローカリティ」が融合していることとなるが、伊藤の主張はどうもそうした皮相的なものではないらしい。

あるいは武田・片岡・澤村らの調査委員会の意向を波江課長らと消化したうえでの落としどころであったのかもしれない。そう考えれば、城郭建築風の重々しい楼閣を冠せず、日本風であることをとどめながらも簡素で機能的なデザインという絶妙なものであったということが出来るかもしれない。当館の意匠を選択、決定するに至った経緯についてはいまだ不明で今後の大きな課題として残る。

伊藤は当館の実施設計と並行して室戸台風で壊滅的影響を受けた市内小学校の木造校舎の復興に尽力しているほか、大阪市立大学本館の設計を主導、のちに大阪市立大学家政学部の初代教授に着任して後進の指導にあたり、小学校建築の経験などを活かして『建築保健工学』などの著作を残した。

3. 自慢の採光法

さて、先述の澤村・波江協議（ホ）にもある通り、美術館建設当時、館内の設備で特筆すべきことのひとつがその採光法であった。これについては設計者の一人である渡邊久雄の功績が大きいようで、最先端の技術を海外の事例に照らし合わせて調査・実験を行うなど専門的で実践的な考察を加えたうえで設計をおこなったようだ。(註19)先に見た澤村の指示によるものだろう。参考に供されたもののうち、実際に採用されたのはニュージーランドの建築家サミュエル・ハースト・シーガー（Samuel Hurst Seager）の実践及び研究をもととしたトップサイドライト採光であった。(註20)天側窓採光という和名を与えられた当館ご自慢の採光法は本邦で初めて採用されたもので、周囲の注目度も高かったことは、竣工を報じる際に「陳列室及び展覧会室の採光には特別の注意が払われ、我国では初めて天側

窓（top side light）が一部に採用された」と特記されていることからもうかがえる。[註21]

この採光法の主眼は展示ケースや壁面に掲げられた絵画の画面の反射をいかに防ぐかという問題であった。その解決のために屋上に三角屋根を設け、展示室壁面にはこの三角屋根から斜光が差し込む仕組みであった。また、壁面ケースの床面を高くすることでさらに反射を防ぐ工夫もおこなわれた。さらに、採光法の工夫を最大限に活かすため、壁面ケースのガラスは当時世界最大級のガラスメーカー、英国・ピルキントン社製とこだわりぬいた。

現在では自然光に含まれる紫外線等の有害性が文化財保護の観点からふさわしくないことや、光量・光線・色温度が一定せず観覧にふさわしくないこと、さらには保安上の問題などから、天井のガラス面はふさがれており、展示室内の照明はすべて人工光源によっている。したがって、当初のような自然光による照明はおこなっていない。ただし、このトップサイドライト採光は現在北二階展示室の天井部にその名残を認めることができる（**図3**）。採光用の窓ガラスこそふさがれているが、壁面の展示ケースの規格は当初のものとそう変わりはない。天井小屋裏をのぞかせるような構造と、展示ケースの床面が高いのはこの採光法の残滓なのである。北二階でのご観覧の際には是非こうした点にもご注目いただきたい。

（図3）大阪市立美術館　北2階第9展示室

斜めに差し込んだ自然光が柔らかく降りそそぐ中での作品鑑賞は、うらやましくもある。さながらフェルメールの名画を彷彿とさせる空間であっただろう。こだわった壁面ケースのガラスも戦後当館が連合国軍に接収された際、進駐軍にほとんどすべて割られてしまい、もう残っていない。接収解除ののち、展示活動を再開するときには大型の厚板ガラスの調達ができず、現在の泉布館からガラスを移設している。ところがこのガラスも大型ケースの高さ半分までしか覆うことができなかったと聞く。[註22]

美術館の設計者　むすびにかえて

上記したことをまとめるならば、外観意匠は伊藤、内装・採光法等は渡邊、それらを指揮監督するとともに設立委員武田・片岡・澤村や議会との折衝・調整にあたったのが波江・富士岡両課長という分担だろうか。一見素気ないモダン建築に見えて、実は随所にメッセージが織り込まれているのだ。その一つ一つを解き明かしていく作業は今後も続けなければならないだろう。そうした試みのひとつとして、手元に残された資料と近年の研究成果を頼りに美術館本館を観察した結果を上で述べてきたが、もとより門外漢の憶測に過ぎず、誤謬を畏れる。たかが八十年前のこととはいえ、されど八十年。昭和は遠くなり、当時のことを知る人とは幽明境を異としている。しかし、関係者のご子孫係累の方々におかれては直接間接に当館の設計あるいは建設のことをお聞き及びのこともあろうかと思う。未

確認ながら設計時の技手・渡邊氏の手元に図面が残されたとも仄聞する。今後も引き続き資料の収集、聞き取りなどの調査を進めることで当時の設計思想を明らかにするとともに、美術館本館建物の顕彰と保存活用とに努めたい。

註

1 阪井卓編著『大阪市立美術館五十年史』大阪市立美術館、一九八六年。村松寛「大阪市立美術館」『日本美術工芸』二一七―二二〇、一九五六・五七年。のち、村松寛『美術館散歩』（河原書店、一九六〇年）に再録。美術館建設前史については以下も参照。土井久美子「美術館小史」『美をつくし』一八五、大阪市立美術館、二〇一六年。

2 「大阪市美術館新築設計圖案懸賞募集」『建築雑誌』三四（四〇八）、一九二〇年。

3 『五十年史』一〇頁。

4 植松清志「再読 関西近代建築―モダンエイジの建築遺産（一三）大阪市立美術館」『建築と社会』九一（一〇五七）、日本建築協会、二〇一〇年。

5 前掲註4植松氏論文。

6 『五十年史』一〇頁。

7 実方葉子「茶臼山本邸」『住友春翠』泉屋博古館、二〇一六年。また、茶臼山本邸については以下も参照。坂本勝比古『日本の建築［明治 大正 昭和］五 商都のデザイン』三省堂、一九八〇年。

8 波江悌夫「慶澤園と大阪市美術館」『建築と社会』三九（一）、一九五八年。

9 前掲註8波江随想。

10 笠原一人「伊藤正文―反転する純粋技術」『建築文化』五五（六三九）、二〇〇〇年。のち、『モダニスト再考 日本編』（彰国社、二〇一七年）に再録。笠原一人「「日本インターナショナル建築会」における伊藤正文の活動と建築理念について」『日本建築学会計画系論文集』六八（五六六）、二〇〇三年。「《展示記録》大学史資料室第二四回展示 モダニズムの学舎と建築家・伊藤正文 大阪市立大学昭和初期学舎群」『大阪市立大学史紀要』五、二〇一二年。

11 笠原一人「日本インターナショナル建築会―その理念と活動」・川島智生「日本インターナショナル建築会が遺したもの―科学に依拠したモダンデザインの視点」京都国立近代美術館監修『復刻版 インターナショナル建築 別冊』国書刊行会、二〇〇八年。

12 前掲註10笠原氏論文。

13 黒田門については以下を参照。谷直樹・岩間香「「よと川の図」と福岡藩蔵屋敷」植松清志編著『大坂蔵屋敷の建築史的研究』思文閣出版、二〇一五年。

14 前掲註8波江氏随想。

15 『インターナショナル建築』三（二）、一九三一年。引用に際しては旧字を常用体に改めた。

16 伊藤正文「伝統・趣味・意匠」前掲註15誌掲載。

17 渡邊久雄「竣工建築物 大阪市美術館」『建築雑誌』五〇（六一八）、一九三六年。

18 伊藤正文「岸田日出刀氏の講演『現代と建築』と、国際化の意義」『建築雑誌』四三（五二五）、一九二九年。前掲註10・註11笠原氏論文。

19 渡邊久雄「美術館の採光法の研究」『建築雑誌』四四（五四〇）、一九三〇年。

20 渡邊久雄「大阪市美術館の採光法その他に就て」『建築雑誌』五〇（六一八）、一九三六年。

21 「大阪市美術館竣工」『博物館研究』九（五）、一九三六年。

22 『五十年史』二六頁。前掲註1村松氏著作。

【付記】帝冠様式については東京大学准教授海野聡氏にご教示を得た。末筆ながら記して謝意を表したい。